

大学の発展と共に伸びゆく幼稚園

大東文化大学附属青桐幼稚園園長 長谷部 文子

大東文化大学附属青桐幼稚園は戦後まもなく（昭和 26 年）豊島区池袋 3 丁目に文政幼稚園として設置されたのが始まりです。当時大学は文政大学と称しており、この名称「文政」を付しての名前でした。その後大学が池袋から板橋区西台（現高島平）へ移転した際一時休園いたしました。ここに高島平団地が建設され昭和 47 年板橋区からの要請を受け、また、大学は既に文政学部を文学部と経済学部へ改組しており、新たに外国語学部と文学部に教育学部（小学校、幼稚園教諭養成）を設置することになり、人文社会系総合大学に発展し、幼稚園の名称も「文政」から大学のシンボルマークである「青桐」として、装いも新たに再出発しました。



青桐幼稚園の教育の特色としては「知育・徳育・体育」バランスのとれた人格形成に主眼をおき、自分でよく考え、判断して行動できる子、人の痛みがわかる思いやりのある子、たくましく、気力に満ちた元気な子等の育成に取り組んでおります。知能を育てる漢字による教育は本園の特色です。昭和 53 年に就任した石井勲元青桐幼稚園々長（大東文化幼少教育研究所・所長）が古くから「三つ子の魂百までも」と言われ、幼児期に養われたあらゆる能力がその後の一生を決定するという大脳生理学の理論に基づき、漢字による独自の教育法を提唱しました。昭和 48 年アメリカのフィラデルフィアで開催された第 6 回人間能力開発大会で「幼児期の漢字学習は幼児の知能を高める働きがある」という発表をして、「この研究は人類の進歩に貢献するものである」との評価を受けて、金賞を受けました。そして、第三十七回菊池寛賞も受賞しました。が、漢字は教えるにも、覚えるのも大変難しいものと、かなり長い間、多くの人々に考えられてきました。そのため「幼児に漢字はとんでもない」と言う幼児教育界での固定観念に縛られている人にはなかなか理解されず、四面楚歌の状態が続きました。そのような状況下でも、青桐幼稚園では、開園当初（昭和 47 年）より漢字による教育を実践し、教育効果をあげております。私たちはこの実践を通して子供たちの能力のすばらしさや、一生のうちで最も漢字を吸収できる時期であること「百聞は一見に如かず」を実感させられました。本園の漢字を使つての教育方法はいまや全国的に知られ、幼稚園や保育園普及・啓蒙活動を展開しています。青桐では、現在の少子化においても、漢字教育を受けさせたいと多くの入園希望があり保護者の支持を得ています。これからもこの教育理念を受け継ぎ充実させ、幼児教育の重要性を確認しつつ、発展させる役割を果たしていかなければならないことを痛感いたしております。

第 1 回研究会報告

百年史編纂事前研究会の開催

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、本年より大東文化大学百年史編纂事業に向けた事前研究会を開始することになりました。第 1 回目となる研究会は、2007（平成 19）年 7 月 25 日、京都大学大学文書館より西山伸准教授をお迎えし、本資料館会議室に於いて実施いたしました。

西山先生は、1990 年 9 月に発足をみた京都大学の百年史編集委員会に身を置いてから、1997 年の刊行開始・2001 年 3 月の刊行終了に至るまでのおよそ 10 年間、一貫して編集事業に携わった経験をお持ちになっておられます。その『京都大学百年史』は全 7 冊（総説編 1・部局史編 3・資料編 3）で、総頁数が 7956 頁に及ぶものとなって完成しております。

研究会では、はじめに西山先生が、「大学沿革史編纂の歴史と課題 — 『京都大学百年史』の経験を踏まえて —」と題し、①大学沿革史編纂の歴史、②『京都大学百年史』について、③大学沿革史のこれから、④大学アーカイブスについて、など多岐にわたって説明されました。引きつづく質疑応答では、ご自身の体験を通して意見を述べられ、とくに沿革史編纂事業は 10 年単位で取り組む必要があること、編集大綱を早い時期に定めて構成・ボリューム・予算規模等を勘案しておくこと、さらに編集体制の確立と編集室の重要性とを強調されました。

今回の研究会は第 1 回目ということで、緊張した面持ちで一同西山先生のお話に聞き入っておりましたが、西山先生より本資料館の運営委員会委員である寺崎昌男先生の著述を引用されて、大学沿革史編纂の意義は「最も本質的な自己点検・評価作業」であると告げられ、参加者一同の共有するところとなって終了いたしました。

（東洋研究所教授・歴史資料館運営委員会委員 兵頭 徹）



西山 伸 氏